

小論文

法文学部（人文学科 多元地域文化コース）

注意事項

- 一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
- 二、この冊子は、表紙を除き八ページである。
- 三、「解答始め」の合図があつたら、まず、黒板等に掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出るこ
と。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。
- 五、解答用紙は切り離さないこと。

次の文章を読んで設問に答えなさい。

ヨーロッパでは、古くからの伝統として、教会が初等もしくは中等教育をうけもち、大学もまた宗教施設の延長線上にあった。従って日本の文部省のような機関はない。日本とは、歴史が異なっているのである。

近代日本ができあがってゆくとき、何から手をつけていいかわからないほどに問題が山積していた。教育面がとくにそうだった。ヨーロッパが数百年かけてやってきたことを、短期間でやらねばならなかった。

文部省という機関・機能を設けることを考えたのは、明治初期政権の大きな発明だったといっている。

たとえば、

「おとうさん・おかあさん」

という言葉まで「発明」せざるをえなかったのである。

たいていの国において——たとえば韓国語のオモニ、英語のマザー、ドイツ語のムッターなどのように、この言葉ばかりはむかしからあらゆる階層を通じ、ただ一種類の言葉として共有されてきた。

ところが日本語の場合、武士階級では父上・母上ははうえなどといい、浄瑠璃じやうるりでは父様・母様かかさまであり、江戸の職人はおとつあん・おつかさんという。また京都の公家家庭くけでは御父様・御母様おとうさまであった。さらには地方によってよびかたがちがいで、『大辞典』（平凡社）によると、江戸期の南部地方（岩手県、一部青森県）の農村では父親をタタといたりした。おなじタタでも出羽（山形県）の置賜おきま盆地では、母親のことをそうよんだというのである。

このいわば、言語の一大混雑場を、おとうさん・おかあさんという、ごく一部でつかわれていた言葉を「規準」として示したのは文部省で、教科書を通じて普及させた。もしこのことがなければ、こんにち私どもはよほど不自由だったにちがいない。

ついでながら「おかあさん」という言葉は、江戸および京・大坂の中流以上の商家あたりでつかわれていたらしい（雑俳『柳多留』四七）。しかし武士階級からみれば、軽すぎるよび方だったように思える。

以下は孫引^{まきびき}で、じかにあたったわけではないが、明治三十六年の『尋常小学読本』二に「おかあさん。おはやうございます」と出ているそうである。これが「おかあさん」の初出らしい（この教科書が出たとき、東京の山ノ手の奥さまが、なぜ学校でそんなきたない言葉を教えるのか、とどなりこんできたという挿話がある）。

私は、日本における文化の多様性の礼讃者である（でなければ、文化的独創性というものが出にくい）。

しかし英国のように階層によって言葉がちがっていたり（逆にいえば言葉のちがいが階層意識をいつそう深めていたり）、また五十年前の中国福建省の閩南^{びんなん}・閩北方言のように、山一つ、谷一つごとに方言があつて、隣村にゆけばいっさい言葉が通じないというようなぐあいであつては、こまる。

やはり、言語文化に要求される明晰^{めいせい}と正確それには洗練さらには高度な情緒性のためには、標準になる言葉が必要なのである。

標準日本語の成立は徐々にこなわれて大正末年に完成したと私は思っているが、その役割は、巷^{ちまた}においてではなく、小学校教科書と、教育現場によつてになわれた。

すくなくとも「おとうさん・おかあさん」の成立と普及は、明治維新で成立したはずの一階級主義の定着に大きく役立ったかと思われる。

一階級主義といえは、

「です」

という軽い敬語も、右の「おとうさん・おかあさん」の仲間として考えていいのではないか。これも、明治の小学校教科書からはじまったかと私は思う。

それまで「です」という言葉はなかった。

敬語としては、ふつう、江戸も京・大坂も「でございます」であつた。軽い場合は、江戸では「でござんす」、大坂では「でござす」だつた。

英語でいえば、**び**ですむこの動詞が、こうも長つたらしくては、明晰を要求される近代語として不都合だった。そこで、文部省が「です」という言葉を造語したかと思える。

です、が教育の現場にひろまるころも、苦情が殺到したという。下品だという。

「タイコモチの言葉じゃないか」

というむきもあった。

たしかにタイコモチは「でげす」という言葉をつかっていたが、それと「です」とは同根とは私には思いにくい。

ともかくも「です」の登場によつて、日本語のセンテンスのシツポがずいぶんみじかくなって、言語としての切れもよくなった。

正岡子規（一八六七—一九〇二）が書いていることだが（子規の文章のどこにあったか、いま手もとの全集でざっと検証しているのだが、あわてているせいが見あたらない）、ともかくもかれが中学生（県立松山中学校。現・松山東高校）のころ、国語科という教科があたらしく加えられたと言っている。

私は、子規と漱石が、近代文章日本語の確立者であるように思うのだが、ところが、当のかれが中学生のころ、はなはだしく国語の授業をきらった。かれによれば、全員がきらいだったという。

かれの中学入学は明治十三年で、大学予備門を受験するため退学するのは明治十六年であつた。国語科が入ってくるのは、この間のことである。

私は、小・中学校の国語科の歴史についてしらべたことがない。だからくわしくはいえないが、当時の中学校の場合、明治初年において「洋学校」的な色彩が濃かつたため、子規の在校以前までは国語科は軽視されていたか、なかつたかのどちらかにちがいない。

それが、あるとき、おそらく文部省が、欧米の学校教育の中心は国語科にあると気づいて、管轄下の全国の学校に布達したので

はあるまいか。

子規の当時の松山中学校の校長以下には、「国語科」とはなにかという内容が把握できなかったらしい。

以下は、当時の職員室を想像してのことである。

「漢文や英語を教えるというののはわかるが、日本語をわざわざ教えるとはどういうことか。世間や生徒たちが使っている言葉ではないか。それが、学問だろうか」

と、どなる先生がたとえいたとしても、ふしぎはない。

想像だが、それを教頭さんあたりがなだめる。

「文部省の通達は通達だから、ここでどう実施すべきか、諸先生のお考えをうかがいたい」

「国語というものがござりましたな」

ふとそんなことを言いだす先生もいたかと思える。国語から連想して、そういう分野を思いだしたにちがいないが、ひよつとすると、それが「妙案じゃ」ということになったのかもしれない。

国語とは、いうまでもなく江戸期に興った日本古典を対象とする学問である。最初は、研究的だった。研究の時代に、荷田春満、賀茂真淵、僧契沖らが出た。それが国語第一期というべき段階である。ついで、研究と併行して思想的にも大きく展開をみせたのが本居宣長であった。第三期になると、すこし変質する。多分に神道主義的——いわば宗教的——になった。その第三段階を展させたのが、平田篤胤であった。

その平田国語は、江戸末期、一つの流行として、全国の庄屋・富農階級に普及していた。明治後は、第四段階といふべきものだった。平田国語から必要な成分を抽出して、国家神道ができあがった。ただ、子規が中学生だった明治期には、まだそういうものにはできあがってはいなかったろう。ただ神職などが、平田国語の段階を素養として学んでいたのではあるまいか。

「神主さんをよんできて、祝詞でも教えてもらえばどうか」

これが、現実になった。

「祝詞」の古いものは「延喜式」にもおさめられていて、上代日本語の文学資料の一つであることはまちがいないが、なんといつても、儀式のときに神にむかって身をつつしんでと見える言葉で、人の心をうつ詞華しわかとはいえない。

言語は、たれにとつても、誕生のときから、母親の言葉として、耳を通じ、大脳を刺激しつづけてきているものである。音楽や絵画よりも、一個人の成立にとつて、生理的でもあり、原初的でもある。

言葉は、人の感性、悟性、あるいは知性に働きかける唯一の（絵画、写真、数字は補助手段にすぎない）伝達力をもったものである。

人類の感性、悟性、知性は、文明の出發以来、言語によつてできあがってきた。

もし言語がなければ、ギリシア・ローマの文明も、中国の春秋戦国の文明も、日本の奈良朝以来の、世界史にとつて重要な一部を構成する歴史も、無にひとしくなる。それらの人類のいとなみは、崩れた石柱、出土品、調度品など、単に遺物にすぎなくなつてしまうのである。言語のみが人間の精神を表現し、構成し、かつ人間に物を考えさせ、創造させる「機能」以上のものなのである。神ロムスすら言語であると聖書ではいう。

言語の基本（つまり文明と文化の基本。あるいは人間であることの基本）は、外国語ではない。

母親によつて最初に大脳に植えこまれたその国のつまり国語なのである。

国語（日本語）は、日本文化二千年の所産であるだけでなく、将来、子供たちが生きてゆくための唯一の生活材であり、精神材であり、また人間そのものを伸びさせるための成長材でもある。

ヨーロッパは、過去千年以上、あらゆるものは言語によつて表現され、それがもつとも高度なものであると信じてきた文明であ

る。

この文明は普遍性が高く、十九世紀以来、他の世界にまで及んでいるが、私一個の思案としては、ヨーロッパの言語偏重は、すこし行きすぎかと思える。

たとえばかれらは、古代ギリシア以来の伝統として、対話ダイアローグと討論ディスカッションを好む。学校ではさかんにこれを教える。アメリカも、同様である。

家庭でも、母親たちは、子供に、右の二つを基軸とした言語教育をする。簡単にいえば、

「議論に負けるな」

ということである。

「自己の主張、希望、否定と肯定などを、精密に言語化せよ。言うについては、明晰であれ。矛盾のあることを平然と言うべからず。感情をまじえるべからず。言語。すべては言語」

などと教える。そのことが、個人の独立と尊厳をつちかうことに役立つと信じられているのである（個人の独立がなければ欧米社会では生きてゆけない）。

その結果、欧米人の討論ディスカッションは、多くの場合、行きすぎて、相手の議論の小さな欠点をみつけると、それを拡大して、ついには相手を全否定したりもする。いわば、日本人の感覚での「空論」になりやすい。

貿易摩擦にしても、欧米は、ぼう大な言語量を日本にむかつて投げつけてきているが、日本人に右の伝統や習慣がないために、すくみきつている。黙っていれば、認めたとされる。あるいは、無知とされる。

「日本人は英語がへただから、多くを語らず、主張もひかえ目にする」

という人があるが、そういうことはありえない。国語がへたなのである。英語など通訳を通せばなんでもない。いかに英語の達人が通訳してくれても、スピーカーの側での日本語としての国語力が貧困（多くの日本人がそうである）では、訳しようもない。

国語力は、家庭と学校で養われる。国語力にとつての二つの大きな畑といってよく、あとは読書と交友がある。国語力を養う基本は、いかなる場合でも、

「文章語にして語れ」

ということである。水、といえ水をもつてきてもらえるような言語環境（つまり単語のやりとりだけで意志が通じあう環境）では、国語力は育たない。

ふつう、生活用語は四、五百語だといわれる。その気になれば、生涯、四、五百語で、それも単語のやりとりだけですごすことができる。ただ、そういう場合、その人の精神生活は、遠い狩猟・採集の時代とすこしもかわらないのである。

言語によつて感動することもなく、言語によつて叡智えいちを触発されることもなく、言語によつて人間以上の超越世界を感じることもなく、言語によつて知的昂揚こうようを感じることもなく、言語によつて愛を感じることもない。まして言語によつて古今東西の古人と語らうこともない。

ながいセンテンスをきつちり言えるようにならなければ、大人になって、ひとの話もきけず、何をいつているのかもわからず、そのために生涯のつまずきをすることも多い。

「なぜ水がほしいの？」

と、問いかけてみる。

「のど、かわいた」

子供は、あたり前のことをいう。これでは、国語力とはいえない。

「運動もしないのに、どういうわけか、のどがかわくのです。気分はわるくありません」と、自分の現状を、ちゃんと言語化できるように、子供をしつけてやらねばならない。

明治維新で江戸期の言語（話し言葉・書き言葉の両方とも）が御破算になり、あらたに日本語が出発した。その後、まだ百数十

年しか経っておらず、さらにいえばさきへのべたような意味での「国語はいかに人間にとって大事か」という考え方については、ごく最近はじまったばかりである。

学校の現場は、国語建設の現場でもある。

この文章に、結論はない。筆者としては現場の先生方に、祈るような気持ちでいるだけである。

『十六の話』 司馬遼太郎著、中央公論新社、一九九七年」

※出題にあたり、常用漢字表を参照して一部にルビを加えた。

設問一 本文の内容を要約しなさい。(四〇〇字以内。ただし、句読点および改行のために生じる空白も解答文の字数に含まみ
す。)

設問二 著者の主張を踏まえつつ、言葉についてあなたの考えを述べなさい。(六〇〇字程度。ただし、句読点および改行のため
に生じる空白も解答文の字数に含まみす。)(解答欄は七〇〇字)